

読・書・漫・遊

82

愛・蔵・秘・蔵・こ・の・3・冊

3books

人それぞれに本の読み方はあるだろう。

必要に迫られる読書、楽しく心に潤いを与えてくれる読書……

企業人にとっての読書の存在とは。

鎖国マインドを解き放て

今、日本はあらゆる面で鎖国マインドに陥っている。国際人が不足している人材の鎖国、歴史を学ぼうとしない時間的鎖国が顕著だ。日本人を鎖国マインドから、どう解放するか考える本を紹介したい。

日本の外交政策は目指す国家像が不明確、だから目標への戦略が不透明、腰が据わらず、場当たり的となる。60年前の占領期の大変な時期に活躍した人物に白洲次郎がいる。『風の男 白洲次郎』（青柳恵介著、新潮文庫）もあるが、北康利氏が著した『白洲次郎 占領を背負った男』はGHQとの確執、サンフランシスコ講和条約での官僚とのやり取りも詳しい。白洲次郎という人間は、「プリンシプル」を大事にし、

◎今月の選者

黒川 清

日本学術会議会長

『白洲次郎 占領を背負った男』

(北康利著、講談社)

『あの戦争は何だったのか』

(保阪正康著、新潮新書)

『日本がアメリカを救す日』

(岸田秀著、文春文庫)

からで、祖父と福沢諭吉との交友、それを受けた父親等からの影響、そして勉強の本質と紳士のあり方を学んだケンブリッジ留学が大きな影響を与えている。白洲について知ると、世界という地理軸、歴史という時間軸から個人の考えを打ち出し、行動する人間こそが、真の国際人だとわかる。今の日本に、肩書がなくても「個」として存在できる人がどれだけいるか。日本と世界を俯瞰的にとらえて発言し、行動できる人がどれだけいるか。国際化とは言うものの、思想にも、行動にも反映できない人ばかりだ。

戦後占領下の状況と白洲の活躍を見ると、今の日本に何かが欠けていると感じないか。歴史を俯瞰できて「プリンシプル」で行動するリーダーである。歴史は人類の行動を集積した結晶であり、リーダーには不可欠な下地だ。読んでほしい本には『日本はなぜ敗れるのか 敗因21カ条』（山本七平著、角川書店）は、はじめ数多いが、保阪正康氏が精力的に昭和史を書いている。その中でも『あの戦争は何だったのか』を薦める。「あれだけの戦争をしておきながら、戦争を知ることには勉強、不熱心、戦争という歴史を忘却することが進歩と思ひ込んでいるようにさえ感じる。国民的性格の弱さ、狡さと言ひ換えて良いかもしれない」と指摘する。「大本営は自分たちに都合の悪い状況を隠すことに汲々として、決して自己省察しない」「戦争は何のために続けているのか」という素朴な疑問もないし、答える資料も目にしたことがない」と指摘する。昨今の状況とどこかがかなり似ていないか。歴史に学ばないリーダー達を持つ国は危うい。

また歴史を学ぶことは、そこから現実を見つめ、将来を見るとき重要な作業なのである。なぜなら「人間は本能の壊れた動物」なのだ。だから自我で生きる。外的自己（現実我）と内的自己（幻想我）の乖離がコンプレックスであり、自覚されなければ幻想に生き、程度がひどければ精神的におかしいということになる。国家も個人と同じで、現実我と幻想我の乖離を認めたがらない。だから国家の歴史に由来する創成神話、建国神話を作り、史的幻想が生まれる。これが岸田秀氏の主張する「唯幻論」である。

国際関係も国内社会を見ても、

日本特有な官尊民卑、卑屈と傲慢、甘えの構造、極端から極端へ、精神的鎖国、戦略的思考力欠如等々、史的幻想の背景がここにある。養老孟司氏の唯幻論がバカ売れする一方で唯幻論が注目されないのは、本当のことを指摘されて胸にグサリと来るので認めたくないからではないか。この幻想を認識しない限り、同じことを繰り返すのは人間も国家も同じだ。個人は死で終わるが、国家や国民はそれではたまったものではない。昔から言うのではないが、「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」と。国民も特に社会的責任の大きい立場の人も、幻想に逃げ込んではいけない。岸田氏の『日本がアメリカを救す日』は、米国の攻撃性の根源の史的幻想も指摘する。本書は英訳され米国で出版されるという。どんな反応があるか。



●『白洲次郎 占領を背負った男』（北康利著、講談社）●『あの戦争は何だったのか』（保阪正康著、新潮新書）●『日本がアメリカを救す日』（岸田秀著、文春文庫）